

解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（11・上）

—— 金玉煥さんへのインタビュー記録 ——

藤永 壯／高 正子／伊地知紀子／鄭 雅英／皇甫佳英
高村竜平／村上尚子／福本 拓／高 誠晩

A Survey of the Life Histories of Resident Koreans in Japan
from Jeju Island in the Immediate Postwar Period (11) — Part I —
— An Interview with Kim Okhuan —

FUJINAGA Takeshi, KO Jeongja, IJICHI Noriko, CHUNG Ahyoung
HWANGBO Kayoung, TAKAMURA Ryohei, MURAKAMI Naoko
FUKUMOTO Taku, KOH Sungman

本稿は、在日の済州島出身者の方に、解放直後の生活体験を伺うインタビュー調査の第11回報告である。この調査の目的や方法などは、「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（1・上）」『大阪産業大学論集 人文科学編』第102号（2000年10月）に掲載しているので、ご参照いただきたい。

今回の記録は、東大阪市在住の金玉煥さんのお話をまとめたものである。金玉煥さんは1938年、大阪府三島郡吹田町（現・吹田市）のお生まれで、本籍は済州島朝天面大屹里（現・済州特別自治道済州市朝天邑大屹里）である。

インタビューは2008年7月12日、東大阪市の「デイサービスさらんぱん」で、藤永壯・高正子・伊地知紀子・皇甫佳英・高村竜平・村上尚子・高誠晩の7名が聞き手となって実施した。テープから起こした原稿は伊地知が中心となって編集し、朝鮮語から日本語への翻訳は高正子が、参考地図の作成は福本が、用語解説と最終チェックは藤永が担当した。

以下、本稿の凡例的事項を箇条書きにしておく。

(1) 本文中、文脈からの推測が難しくて誤解が発生しそうな場合や、補助的な解説が必要

- な場合は、[]で説明を挿入した。
- (2) とくに重要な歴史用語などには初出の際*を付し、本文の終わりに解説を載せた。第4～10回報告で解説した用語については、丸数字で報告番号を、アラビア数字で注番号を記し、かっこでくくった(例：(④- * 13)は第4回報告の* 13をあらわす)。また、2000～2001年の第1回から第3回の報告でとりあげた用語は「(再掲)」と記して解説した。
- (3) 朝鮮語で語られた言葉が文の場合は日本語に翻訳し、下線を施した。その際、日本語の単語が混じる場合はカタカナで表記し、[]で意味を補った。また日本語の文脈で朝鮮語の単語が混じる場合は、一般的な単語や地名などは漢字やカタカナ、あるいは日本語の翻訳語で、特殊な単語についてはハングルで表記し、発音を日本語のルビで示した。
- (4) インタビューの際に生じたインタビュアー側の笑いや驚きなどの反応については、〈 〉で挿入した。
- (5) 話者が語った日本語・朝鮮語は、話者の発音どおりに表記することを基本としたため、いわゆる「標準語」とは異なる場合がある。

なお本稿は言うまでもなく、金玉煥さんの証言からとくに重要と思われる箇所を中心に抜粋、編集したものである。できるだけ客観性に配慮しつつ証言を再現しようと努めたが、編集の手が入っている以上、叙述に編者の主観が反映されている可能性は排除できない。本稿の内容に関する責任は全面的に編者にあることを、あらかじめおことわりしておく。

解放前後の日本での生活

《父が吹田から平壤へ》

—お父さんもお母さんも済州から日本に来られたのですか？

金：[解放前に]吹田で伯父さん^ア、お父さん^ボらが大きな工場を受け持って、やっていたようや。オヤカタ [親方] でした。それで北朝鮮から [人が] 来て、北朝鮮でオヤカタ [として] 教えてくれと。その、仕事することを。ここでは、日本では千円を月給としてくれたのだが、そこに行けば倍の3千円をくれると言うので。だから、お金を多くくれると言ったから、たぶん行ったようだ。私が聞いた話だから、私が幼い時だったから。それでお父さんはその時はいなくて。それで私たち3兄妹、弟と兄さんと私。

—お父さんが北に行かれた時が戦前ですか？ 戦争中？

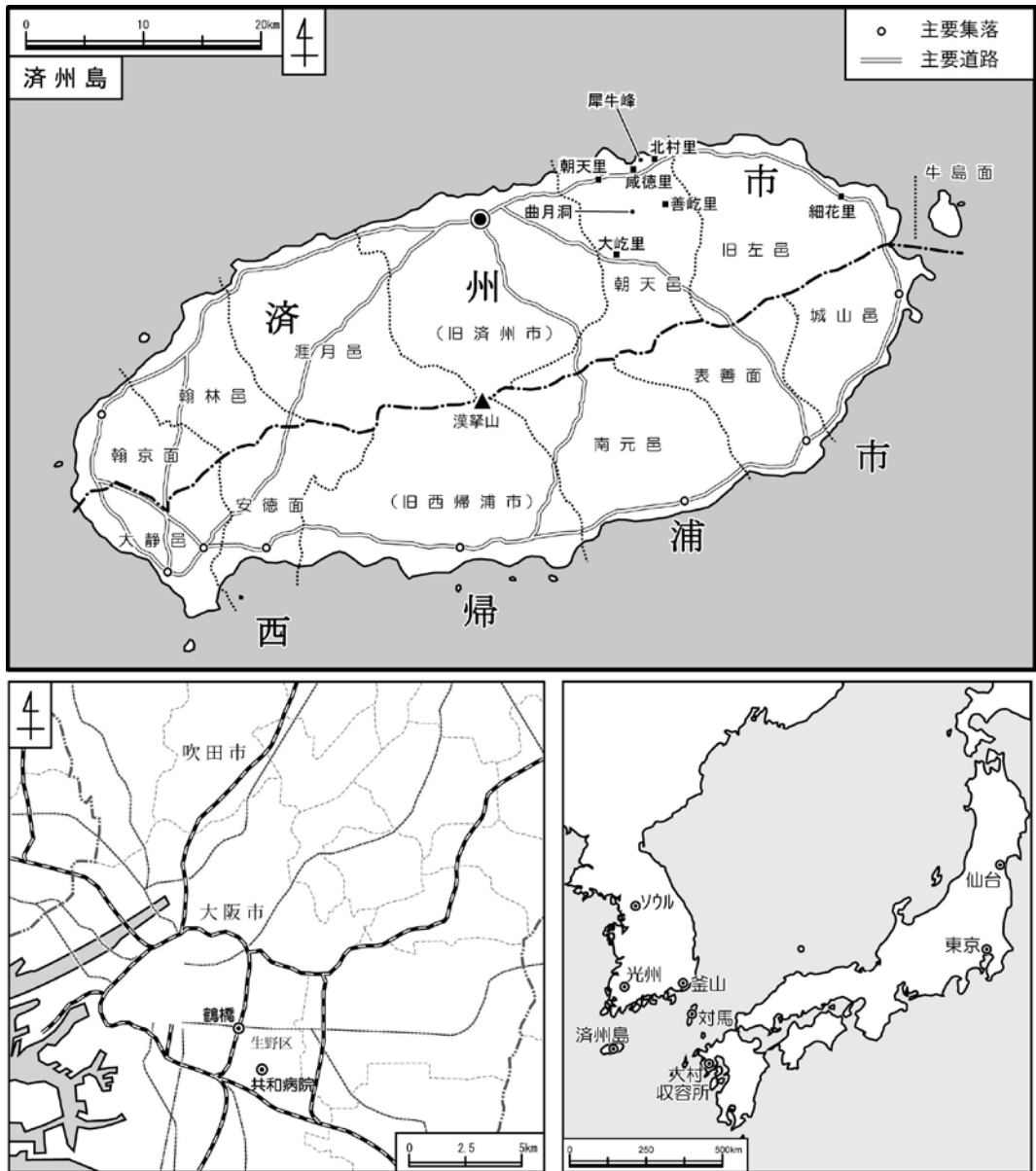


図1 本稿関係地図

金：戦争中。日本とアメリカ [が] 戦争中。

——お父さんは日本でどのような仕事をしましたか？

金：その時には、あのボロ [古着] 積んでおいた。私は何をしていたのか [分からない]。

——吹田でお母さんは、なんか仕事しました？ なんの仕事してたんですか？

金：ボロで。集めたものをひと月売れば月給よりもっと多たって。その時はうちのお母さんはお金ではそんな [に] 困っていなかったようや。

——吹田に生まれて^{チェジュ}濟州に行く前の話、ちょっと聞きたいですけど、あの、吹田で戦争終わる直前に空襲はひどくなかったですか。

金：うち、その時 [小] 学校2年生なる前、9月に [濟州島へ] 行ったから、9月 [の] 前やから2年生上がった途端や。空襲警報が出ると、先生たち友人たちが、穴を掘って。そこに入って行けと言うと、靴も脱ぎ、カバンも脱げたら [放り出して]、泣きながらやった [防空壕に入った] こともあるし。また、学校帰りは、便がしたくて便を服に包んで歩いたこともあった (笑)。

——学校の名前は記憶していますか？

金：分かりません。そこを探してみようとしても探せませんでした。吹田の川を越えて行った。吹田の川を越えると公園がありました。公園があったのですが、その公園に竜の頭から水が出てきていた。それは分かるのですが、その側に学校があるのは覚えているが、ひとりでは探して行けない。

——その時、名前どうされました？ 名前は^{キムオクファン}金玉煥で行かれてました？

金：カネフクさん、カネフクさん、カネフクタマコさん。これは吹田で行ったらあると思うけどな、先生はイワヤ先生。メガネ掛けた先生。

——クラスに韓国の人は何人もいたんですか。

金：それは知らない。なかった[いなかった]と思いますが。うちの^{コモタル}伯母の娘、5年生。また、私と同じ歳の子がいた。

——お兄さんは日本で生まれたんですよね？

金：そう。兄さんも弟もみんな。

——^{アボジ}お父さんも^{オモニ}お母さんも^{チェジュ}濟州で生まれて日本に来たのですか？

金：お母さんは濟州島。

—お祖父さんとお祖母さんは日本に来てないですか？

金：父方の祖母は済州で亡くなったし、父方の祖父は「私が」8歳までいたらしい。私を見ながら。私は幼い時とても小さかった。そんな歌があった。祖父が。「자랑 자랑
웁이 자랑 웁이 자랑 [子どもをあやす言葉]。똥소리기 [驚] おじさんが言うには、お前の身体は小さくても顎がある」, 何か「カラスは毛は黒くても中はきれいです」, そう
いう歌があると言ってね。その歌が上手くて私を揺らしてくれたと。だから父方の祖父
[のことは], うすうす分かってる。

—小学校のころの生活で何か覚えてることはありますか？

金：日本で、生活は、そんな時は食べ物も不自由ないし、何でも食べたし、したから、何も
も [不自由なことは] ないと思う。

《解放後に済州島へ》

金：それで、[父親が平壤に行ったので] 私たちだけ、いったん戦争 [が] 終わり、そう
して済州島に入り、咸徳に行った。だから9月に、チョウド行ってみると。チョウド秋
になって。粟の畑へ行けば粟のヒゲをとって来て、豆も庭に植え。あのじゃがいもも強
いから、新じゃがを掘って食べて。そんなことをしていた、行ってみると。

—^{해문도}咸徳に帰る時は船で、大阪から船で帰られたんです？

金：大阪から対馬行って、対馬から海女の家にひと月暮らして、そこから。海女の家
が潰れて[そこへ入った]。そこでもみんな[船を]直して、また、済州島に行ったようだ、
その船で。

—船には家族だけが乗って？

金：いいえ、いいえ。何だか船が少し壊れるほどに、ニモツ [荷物]。暮らしていた [生
活で使っていた] ニモツを積んで、人を乗せて、船がイッパイ。だから、海女の家の跡
に。死んではいけないと、生きるために [済州島へ] 行ったんだよ。

—お兄さんも弟もみんな一緒に？

金：みんな一緒に。お父さんは平壤に行っちゃって、私たちだけ、もう対馬で海女の家
の跡にひと月暮らして、済州島に入った。秋になると穀物の収穫する時で。しかし

私は心配なのが、便所、トイレ。豚*1。便がしたくなるとそれが心配になって。便をしに行くと、豚が、大きい豚が出てきて、びっくりして泣きながら。恐がりです。すると祖母が、穀物 [を収穫] すると枝を集めるところがある。その間の穴に用を足してくると、アイゴ、祖母によく怒られた。

本当に心配はそれくらいしかなかった。便所に行くことが。食べるのはべつに。ここ [日本] にいた時は、米のご飯を食べていたけれど、そこ [濟州島] に行くと粟のご飯も食べて。でもその時は珍しいから、これもあれも食べるから。豆も入れて、ご飯炊いて、こんなこと、あんなことするから面白いし、美味しいし。そうして、その時は、訳が分からないから。

4・3 事件

《青年たちの歌》

金：それでも暮らしていると、この時局が起きた [情勢が変わった]。私が10歳、10歳になった年に少しずつ訳が分かってくる時に。10歳、11歳、12歳の時に。うちの家が、ちょうど小高いところにある家だ。老人たちが遊んだり、青年たちも遊んでいる。そこがうちの家のところだから。それで夜には、私も子どもの時だから、こうして外に出てこんなふうにいると、その青年たちが、幼い子が15歳、16歳、17歳、18歳、19歳、20歳、一番歳が多い人で20歳まで。赤いハチマキ [鉢巻]、頭に巻いて。赤いハチマキ。肩を互いにこうして組んで、青年たちが歌を歌って、「私たちは勝ちます」。人が通り過ぎると、「私たちは勝ちます。私たちは勝ちます」。幼い時だからこう立って見るけど。だけど、[青年たちが] いると歌を歌い……。しかし、そのウタ [歌] は何のウタかという。それを忘れることができない。

——歌ってみてください。

金：こうしながら「高く掲げよ赤旗を。その陰で従死しよう [先に逝った人に続いて死のう]。去らば去れ。われらは赤旗を守る。遺体が冷えて死ぬ前に、われらは赤旗を守る」。このような歌を、青年たちがそのようにして*2。また、もうひとつ [の歌] は「死가 세상에 물면 [意味分らず] 三千万の心に新しい春が来て、三千万の心に新しい春が来れば、ああ友よ」。彼らはトンム [友] という。「ああ、トンムよ、私たちを守る。死体が冷えて死ぬ前に、われらは赤旗を守る」。

歌がまた、歌詞が抜けて忘れてしまった。みんなこんな歌を歌いながら。しかし、その青年たちがみんな死んでしまった。この青年たちは山に上って行ってしまった。みんな山に。

—お母さん^{オモニ} [金玉煥さん] は [1948年時点で] だいたい12歳くらいじゃないですか。村の雰囲気がだんだん変だなど思ったのは、その鉢巻をしてる人たちが集まって戦おうというふうな感じになってきて、おかしいなど？

金：その時も、暴徒*3 と思って。「あ、これは山に暴徒青年が」。

—青年たちがデモしたのは4・3 [事件] が起こる前ですか？

金：前に。4・3事件が起こるころに。最初に。最初だからとても元気で、私たちは勝つと。その時、歌も歌うし、とても元気で。しかし、少しすると、ひとりずつ、ひとりずつ殺されて。

—そのお兄さんたちが何で集まっているかというのは聞いたりしました？ 何のために？

金：それはセンソウ [戦争] することで、活動を研究すること。一緒に集まって。このようにしよう。あんなふうにしよう。そんな相談をしてる。

—何の戦争かというのはあまり聞かなかった？

金：聞かなかったけど、これは北朝鮮のことで。

—デモを見ながら村の人は何と言っていました？ 頑張れだとか、こんなことはするなとか？

金：うん、声かける時は、えらい、えらいから、頑張れ、頑張れ、頑張れと。「私たちも応援してやる。私たちは何でもしてやる」。

—その時、青年たちが国を相手にして戦って勝てそうでしたか？

金：アイゴ、夜に戦うのに勝てるはずがない。私の幼い時は何も知らなくても、隠れた人と出てきて戦った人とできるはずがないよ。また、あそこには山の暴徒は少ない、ここ [平地] よりは。それに武器ないし。銃などあり、弾などあれば戦える。竹槍でどうして戦えますか？ その時、一度は青年が元気で勝てるようなことを言って。「心配しな

いでください。すぐ統一します。すぐ統一します。そしたら、私たちは幸せになれます」。そう言ったのだが、みんなきれいに死んでしまった。

——でも小さかったけど、お母さん〔金玉煥さん〕は、その時にこれはすごく、なんか大変なことが起きるといことは、見てたら……。

金：うん、うん。それはそう思った。これは負けるということを知っていた、負けると。山の暴徒は人がだんだん少なくなった。それで、また、洞窟に行って隠れていると、〔討伐隊が〕出て来いと言って、出てこなければ、何か爆弾投げ、その中でみんな死んでしまい。そうして死んでしまった人が多かった。そして、また、ここで死んでしまうなら、ここで死ぬと言って出て来ず、その中で死んだ人も多くて。また、命が惜しくて死ぬ時に死んでも出てくると言って、こう手を上げて出てきた人は生き残った人もいて。

《西北青年団の来島と兄の渡日》

——デモがあった時、そこに西北青年団^{④-＊17}が入ってきていましたか？

金：いいえ、その時は西北青年団が入ってきていない時。その後、西北青年が入ってきて大きな戦争〔武力衝突〕になってしまった。その時、濟州島の人の半分は死んでしまった。漢拏山に上っていくと、漢拏山の暴徒たちと一度はこちらについて、暴徒側に。そうして、そこで、ここで追われるから、自分たちどうしてまた喧嘩をしてしまった。器具〔武器〕もないから、器具も山の暴徒にやっしまい。ここで見ると自分たちどうしてこのように戦って、みんなアリのように死んでしまった。その時、西北青年を船で何隻も積んできたということです。その時、北〔西北青年団〕がみんな捕まえて行って。農業する人、先生をする人、病院にいる人、分け隔てなく、ある年齢の人たちをみんな撃ってしまうから、苦勞して、みんな死んでしまった。

西北青年団として軍隊が入って来て、村に調べが入った。少し若い人がいれば、そのまま捕まえて行って。そうしなければ、また山に来て捕まえて。その時は山の人も恐いし、ここ、下〔平地〕の人も。下の人はあっちこちに、「あの上〔漢拏山側〕の人は暴徒」、そのように話している時だから。ニイサン〔兄さん〕が家にいるから、今〔村の中の〕調査が足りないと言うから、恐くなって「どうすればいいのか」と言って。よそへ行くから人がいない。みんなどこかへ行ってしまった。ニゲテ〔逃げて〕隠れてしまって。だから兄さんが「どうしたらいいか、どうしたらいいか」と言って。その時は草鞋を自分で作っている時だから、仕事が手につかず、草鞋を作るふりをして座ると言って。そ

れと、弟もここに座って、これ兄さんで、私はここに座って。

「西北青年会の人間が」ワッサワッサ集まってきて、「お前のお父さんどこ行った？」と言って。「お父さんいないです」[と答えた]。すると剣を振りかざして。またあっちこっち戸をみんな開いて見た。「お父さん、山に行っただろう？」「いいえ、お父さんいません」[と答えると西北青年団の人が]、またこっちの頬を叩いた。だからニイサン[兄さん]が死にそうだった。私も恐くてそのままニイサン[の]手をこんなふうに握って。だけど、その人たちは出ていって、するといつの間にかうちの兄さんが逃げていなかった。それで、私たち姉弟だけだと、夜中になると、兄さんが帰ってきて。私たちは「どこ行ってきたのですか？」と言うと、ウミ[海]、海に行って大きな丘に隠れてきたと。ただあまりに恐くて、びっくりしたから。「恐くて大きな石があるが、そこに行って隠れていて、今帰った」と。

だから、[兄さんが]お母さんに「アイゴ。私を日本に送ってください。私ここにいると気が狂って生きていけない。日本へ送ってくれ」[と頼んだ]。そう言っている時に、ちょうど叔母が来た。共和病院*4の院長先生のお母さん。叔母も日本から来た、済州島に。「アイゴ、義姉さん家のチェワンちを連れていって」。すると兄さんも「叔母さん、私を連れていって。ここで死にそうです」と言う、「私がどうやって連れて行くの？私も密航で来たから。私がお前をどうやって連れて行けるの？」。「私を何とかして連れて行って下さい」。そうして、どうしようもなく叔母が[兄を日本へ]連れて来た。よかったよ。そうやって何とか来たのだが、それでいくらしないうちに、お父さんも[済州島へ]訪れてきた。

—お兄さんは一緒に歌を歌ったり、青年団の活動したりはしない？

金：しない。しなかった。

—お兄さんはいくつ？

金：私 ポダ豆斗 [より] 3歳上。

—そのころお兄さんは何されたんですか？ 学校はもう終わったのですか？

金：学校はその時5年生やったのに。咸徳国民学校はなかった。大隊本部*5 [として使われていて]。学校はない。

—お祖母さん ハルモニ [金玉煥さん] は学校に通ってたんですか？

金：私ははじめから日本語だけ〔しか〕できないから、学校行っても韓国語ができなかったから、うちのお母さんは、女やから、私は通わないでいいと言って、兄さんだけその時学校に。

——でも日本語で、ここ〔日本〕でずっと育ったんじゃないですか？ 韓国語、濟州島の言葉、それは住みながら自分で覚えて？

金：私、遊ぶ時、日本で遊んだことだよ遊んだ。教えながら子どもらこう集まって座ると「ゲンコツ山のタヌキさん、オッパイ飲んで」やったしな。〔濟州島で〕教えてやったらみな喜んで、「アイゴ、タマちゃん、あれやって、やって」〔と言って〕。

——弟も学校に行かなかったんですか？

金：弟はその時、7歳か。うちと6つ下。兄さんは3歳上。お父さんが帰ってきたらすぐ山から来て捕まえて行って。

《濟州島へ戻ってきた父、そして渡日》

——^{へムドク}威徳にお父さんが帰ってきたら、山に連れて行かれた？

金：そう、そう、そう。それなかったら、ここ〔日本〕で苦労してなかった。

——お兄さんがいなくなった後ですか？ お父さん帰ってきたのが。

金：うん、うん。兄さんは日本に来てもうて〔来てしまつて〕、お父さんが、うちら^お居るところ探して来た。それで山に暴徒として、山へ行った。

——連絡は？

金：連絡は、しょっちゅう来る。

——いつぐらいのことか、覚えていますか？

金：それは、〔金玉煥さんが〕12の時、12、13。

——冬とか、春とか。そういうのを覚えてません？ 暑い時とか、寒い時とか。

金：それは、秋ごろかな。雪は積もってない。夏もあるし、秋もあるし。冬はなかったと思う感じ。

—さっき言われたように、咸徳ハムドクの小学校に軍隊の大隊が駐屯してて。あの、昼間は軍隊がいばってたけど、夜には山の人に味噌をあげるとか。そうしている時に、お父さんは帰って来られて、山に連れて行かれたんですね。その後、お父さんはどうなったんですか？

金：山に行って「戻って」来られへんかったんですね。お母さんが軍隊に行って「軍人たちに」ご飯食べさせて、晩なったら**水瓶**ホボク [水瓶] ^{(9) - * 10}, 済州島で水の**水瓶**ホボク, あるやろ、それで水汲んで。横に味噌やら、針やら、糸やら、ようさん [ぎょうさん] 持って行ってあげて。お父さんは山に上って行って。

うちのお母さんがなんぼ考えしても、これはあかんなと思って。お母さんが金持ちのところに行って、「兄オッパさん、お金千円だけ貸してちょうだい」[と]言うたら。「家、あるから家の登記簿あげるから、千円貸してちょうだい」[と頼んだら]。「アイゴ、何を姉さん、私たちを信じられなくて、そんなふうにするのか。これを使って、いつでも返してくればいい」[と言って]、お金千円貸してくれた。それで、そのお金千円を借りて、お父さんを日本へ送ってみよう。だから、お父さんも日本へ行くと。

日本へ行くのに金千円をポケットに入れて、外祖母が餅をついて、餅をこれくらいにして、米2斗腰に隠して。それで、咸徳の犀牛峰。犀牛峰の下。犀牛峰の下に船、それで小さい船で、日本まで行くことで、それで。これもお父さんに聞いたことやから [だけど]、乗ってみたら山の暴徒3人が乗とったって。びっくりして「アイゴ、兄さん」「シー」。何、話もできへん。「アイゴ、兄さん、ここにどんなですか [どうしてここにいますか]？」というのと、「シー」と言う。

—知らない人みたいにしろと？

金：はい、知らない人、そうして。3人とお父さんと4人、女ひとりが乗って、それで5人。5人乗って、[日本の] どこ [か] の山に下ろしたから、みな下ろして、船を持っている人が金20ウォンをくれながら「ニイサン [兄さん]、これで弁当を買って食べて、あの電車乗る時や、反対に乗りなさい」。それだけ言って、「さよなら」。それだけ言うて、したって。そこまで行って、船で降りて、山からものすげ [ものすごく遠く]、畑から [駅まで] 行くのが、その女性が「アイゴ、お兄さん。助けてください。私も一緒について行く」。「それなら遠くから、ただ遠くからついておいで」。そして、ソノエキニ [その駅に] 来ると、その3人は大阪の方へ乗るし、そこへ行って電車乗ろう思うたら、その3人は「一緒に乗るな」言うて。

——その車両に乗るなって？

金：うん、乗れないようにして。船の人も電車に乗る時に、反対に乗るようにと言ったことも意味がある話やから「お父さんは」「私は反対に乗る」と言って。[3人が乗った]その電車は大阪へ行ってしまい、反対に乗る電車をひと駅、ふた駅、3駅まで行って降りて。そして、そこで一服して。そこから大阪に来る電車に乗ってきて、後で叔母の家を訪ねて行くと、すでにその人ら3人は捕まって。捕まえられていくと、その人は銃殺や。山の暴徒の親分らだから。だから、隠れてここまで、日本まではやっとならぬのに捕まって。

だから、外祖母は「アイゴ、捕まったと言っている。サンスも死んだのか。アイゴ、どうすればいいのか。アイゴ、みんな捕まったと言ってる」。だから、お母さんは話もできず、何も言えず。こうだ、ああだと言うこともできず。「アイゴ、これはどうすればよいのか。サンスも死んだ、死んだ。アイゴ、みんなその船で行った人は5人みんな捕まったと言ってる」。

ところで、少しすると知らせが来て。叔母が連絡してきて。「アイゴ、おじさんは着いて、うちの家に来ている」。だから、とても喜んで、アイゴ、本当に天運が助けてくれたんだ。そんなこともある。

——叔母さんは、その時大阪のどこに？

金：生野区。今もその家に住んでいる。だけど、今回亡くなった。

——叔母さんは日本にずっとおられて？

金：うん。それで、この前 돌아가셨어 [亡くなった]。90何歳で。

——お父さんは、家はどうやって分かったんですか。

金：その前から [大阪に] 居たから、お父さんは。ずっと、居たから。

《威徳での生活》

——洞窟のようなところで住んだことはありました？

金：私たちは一度も山に上っていたことが [ない]。お母さんが病気で、咳をして、喘息があつて、クンクンクン咳をして。「私がどこかに行って咳をすれば、他の人もみんな捕まるから、私は絶対家で死ぬ」と言って。だから、姉弟、家にいて。結局は家に

いる人がよかった。山に上った人は多く死んで。

——咸徳は本来お母さんの故郷ですか？

金：はい。お母さんの実家。

——お父さんはどこ？

金：お父さんは^{コブンタルリ}굽은달리 [曲月洞, 大屹2里の俗称]。咸徳の少し上。大屹里の^{コブンタルリ}굽은달리。咸徳から上がったところ。田舎です。

——そのころアメリカ人は見ませんでした？ ^{ハムドク}咸徳大隊本部にも。

金：見たことない。

——他の村で人が死んだ話、聞いていませんか？ 横の北村里*6か。

金：北村里はほら、絶命してしまった。その北村ではなぜそうしたかといえば、新作路^{㉑-＊1}に城壁^{㉒-＊8}を作ってしまった、車が通れないように。それだから、そのまま部隊から出て行って、その村に入ってひとりも残さず、みんな殺して火をつけて。そのために北村は絶命して。だけど今回行った時も、その北村で死んだことを教えてくれた。見た。本当にその時、北村の人たちは多く死んでしまった。一番多く死んだのは、北村の人が多く死んだ。子どもも大人もなく、ただ見たものをみんな殺してしまっ

——お兄さんが日本に行かれて、その後お父さんが日本に行って。その後、どう過ごされましたか？

金：そのあとはまだ、^{ハムドク}咸徳大隊本部、^{クァンデ モサル}관덕모살*7、広い砂浜がありますね。そこ、いろんな村から車に連れて来て、みな殺されますね、そこで。映画 [で] 見るの以上 [の惨劇が繰り広げられた]。それ見たら。スコップで掘って、「自分で掘れ」言うて。みな掘って、[軍部隊が連行した人たちに] タバコ1本ずつあげて、タバコ1本吸って済んだら、[みな、気をつけ]。そう言うと隊長、小さい大砲 [鉄砲] で、ポーン、パパパパすると、こうして死ぬ人、ある人は「わが朝鮮万歳！」と言って死んだ人もいてね。

また、ある人は、その、よい人に会ったから、ある軍人ひとりが「おばさん、一番最後に立ちなさい。私が銃を当てることにしても当てないから、死んだ真似をして倒れて下さい。私は銃を当てません」と言うて。それでも、それは嘘と思い、「どうして、そんなはずがない」と思って。その時、その人は田舎、善屹の人。きれいな人でした。

順々にみんな [を] 撃って。ひとりにひとつずつ、銃をみんな撃って。ひとつ、パーンという、ポポポポ [と撃つ]。だから [その女性も] そのまま倒れて。銃の風 [発砲の勢い] でそのまま飛んでしまって。だけど夜になると、みんな来て遺体を連れて帰った。いつの間にかそうして。そうして、自分も見ると足だけ、銃に当たっていたと。それで生き残って、山へ上って行ってしまって。山でそれを話すと、自首しろと言ったので出てきて自首した。足は少し引きずっていても生き残って。だから、[軍人の言葉は] 嘘だとばかり思っていたのだが。

うちのお母さんの弟が、その時、結婚してない時ですね。それで、捕まっていって。お母さんが「あの叔父さん [の] 顔を見たらダメ」。「この人、親戚か」 [と討伐隊が] 言ったら、「親戚じゃない」と言ってしまえ。親戚 [と] 言うたら殺されるから、「分からん、分からん、言いや」言うて。それで「ここにいる人、一家、親戚いないのか?」[親戚だと] 言う人、誰もいない。首だけを垂れて。頭を垂れて見ることもできない。でもその叔父さんは、お母さんの顔だけでもチョコチョコ、こう見て。そうしていると「親戚いないですか? 親戚いないですか?」と言って。親戚がいてもいないふりをして、そのまま。人が死ぬのは多く見ました。

—そういう虐殺の場所に出て来いと言われるんですか? 見なさいと。

金: そうそう、そうそう。少しでも目先がきく子か、親戚、遠い親戚でもいれば、捕まえて来て、「この人知っているか? 親戚か?」そのように話して、答えないと殺されているし。その時はひと言、間違って言えば、そのまま銃殺だ。

—お母さんの弟さんは山に行ったんですか?

金: 山に行っとった [ことは]、見たことなかったわ。しかし、捕まってきたから、こんなとこやあんなとこ、殴ったとこがあっちこっち血だらけや。

—お母さんの弟さんはどうなったんですか?

金: その時はどんなしたか知らんけど、今、生きています。日本来て20年くらい住んでいて、今 [済州に] 行って、^{ヘムドク}咸徳海水浴場で大きくして。

—食堂かなんかですか?

金: 食堂、食堂。

—お母さんは連れて行かれたりしたことなかったんですか？

金：お母さんは、そこの大隊本部でご飯をつくって、夜には隠れて山に行つて。それだけして。また、城壁のような、ムラニ [村に] 垣根あるでしょ？そこに歩哨幕に、見回りするね。暗号を使って「土」と言ったら「岩」と言つて。そんなものをお母さんたちが勉強してした。そこを3人ずつ巡察して。女性。

—女性にもそんな仕事をさせたのですか？

金：うん、そう。お母さんたちがちょうどその時、30歳の時だから。ご飯を食べさせ、山に上つて行つて。また、夜にはその巡察して。

—玉煥さんはしなかった？

金：幼かったから。お母さんらは、銃はないから竹槍。大竹で作つた竹槍。竹槍をひとりずつ持つて、何 [か] があつた場合、女がなに、力があつて。

—訓練もさせて。城つくる時は石運んだりするとか、したんですか？

金：なんで、石、みな、すべて。石する [運ぶ] 時は、人も多く殺して。石でつぶれて、足も何して [痛めて？]。その城をつくる時は何も言えなかつた。

—警察がやれつて言うんですね？

金：警察が。

—その時、例えば城つくる時、人が死ぬじゃないですか。お葬式する暇もない？

金：死んだらそれでしまいや。

—埋めるだけ埋めて。それは塙 [城壁] つくつた外のほうにも、埋めには行けたんですか？

金：うん。うん。誰 [か] が死んだ言うから、すぐ誰 [か] が来て、持つて来てまうねん [持つて行つてしまうのだ]。

—持つて行くの？ 親戚が来て？

金：うん、いつの間にか来て、誰々が死んだ、言うたら、いつの間になくなり。本当に……。

—食べるものはどうでした？ 食べるものは、取りに畑に行ったり、できました？

金：うん。だけど、城つくった後は農業もできず、そのまま。だから、食べるものもなく。だから海の幸だけ。海には食べるものが多いから。ヒジキも採って食べ、ワカメも採って食べ。その時は磯もの、サザエ、そんなものも多いから。海のこと、ほとんど食べた。あの城の外に出られないから。

—海には行くのは自由だったんですか？

金：うん。アイゴ、またひとりはいきれいな、その時、30 幾つかの人だけど、捕まって。ある人がその人を捕まえて。水のホボク [水瓶] に水を汲んで飲むミチノヨコニ [道の横に] 砂浜があるのです。だから、こんなふうに見ることもできず。恐くてな。見ないふりして、それを見ると。水 [を汲み] に行つて来て、見てみると、[戻ってきた女性に、捕まえた人が]「服脱げ」と言つて。本当にきれいで、その時、トゥルマク [外套] を着た女性がいなかった。だけど、ソウルで暮らしてきた人だからか、きれいな女性だった。服を着ているのも。[捕まえた人が女性に]「服を脱げ」と言つると、トゥルマクひとつ脱いでは着る。余りにも殴るから、トゥルマクを脱いでしまつて。それから「下のものも脱げ、上のものを脱げ」と言つ。最後には乳房を剣でここをこう割いてしまつて。そうして、結局は指輪と時計を抜いて持つて行つて。殺しておいて、トゥルマクかけて行つてしまつた。

それで、少しいると、お母さんがやつて来て泣きながら、「アイゴ、かわいそうな子や。あの指輪は誰が外していった、あの時計は誰が外していったのか」。泣くのを見ると本当に……。そうして、どうして持つていったのか、死体はすぐになくなって。そんなこともあつた。だから、銃をパーンと当てて [一瞬で] 死んだことは一番幸せ。銃剣で刺して、あちこち刺されると痛くて耐えられない。そのように死んだ人もいるし。

—それは誰がやつたかは分からない？

金：軍人が来て。だけど、[やはり] 人間やな。軍隊も西北青年たちたくさん来て。家に約 5 人も来ていて、4 人は出て行き、ひとりは床にこのように座つて、「姓は何ですか？」[と]、私たちに向かつて [聞いた]。「金海金氏です」と言つと、「私も金海金氏です。私は明日にも結婚する日だったので、軍隊に引つ張られて来ました。その [結婚相手の] 女性はどうなつたか分からない。死んだのか、生きていいのか分からない」と言つて、ため息だけハー、ハーしながら。

「[金玉煥さんのお母さんのことを] お母さんと呼びます」と言つから、人情もあり、

優しい人もいたわ。お母さんが「何か食べたいものがあれば、来て話して、お腹が空けば来て食べなさい。じゃがいもを蒸したものがあるので、じゃがいも蒸したもの持って行って分けるか」と。[その軍人が]「じゃがいも蒸したものありますか?」という「アイゴ、ある」と言っ、これくらいの古いザルに入れてあげるから「アイゴ、感謝します」、こう言っ。「アイゴ、ありがとう。お母さんと呼びます」。

それで二日、三日目に来て、「私たちはどこか違うところに行くことになりました」[と言った]。[こうして] 他のところへ行っ、その部隊の人たちは、みんな死んだ。なかにはよい人もいて、意地が悪い人もいて。とても悪質な「この野郎、あの野郎」と言っ「みんな悪い奴、この犬コロ、畜生のような奴」、そのように罵倒する者もいて、また、たまに心優しい人もいて。

—供出したのもあるのですか？ 供出したもの。穀物や何やら全部出して。

金：それは山から来た人たちが持って行っ。

—部隊では何を？

金：部隊ではそんなものなんか。米でご飯をつくってやるから、軍隊は食べるものに苦労せず出て来て。だから、山にいる人だけ飢えたり、食べたり。牛も捕まえて食べ、馬も食べ、そんなもの。主にその肉を蒸して食べ。思い通りに食べるものもなくて。

—良民証のようなものはありませんでしたか？ 証明書みたいな。

金：そんなこともよく分からない。

—でも自由に行ったりできなかった？

金：だから、どこかの親戚の家の祭祀にも行けず。

—捕まった叔父さんはどうなったのですか？

金：どうなったのか知らない間に出てきて、結婚して、間もなく日本へ行っってしまった。

—お父さんも山へ行っ、たのに、うまく日本に逃げられましたよね。その時。

金：そう、そう、そう。お父さんは運がよかった。日本に出て来なければ、私たちもみんな死んでいた。お父さんひとりのために。暴徒の家族と言っ。

——お父^アさん^ボが日本に行った後に、そのことでお母^オさん^モが取調べを受けたりとかは、なかったんですか。

金：なかった。だから「どこに行った？」と言うと「知らない」と。「犬のように足が早い人がどこかへ行ってしまったのか、私にどこへ行くかも言わずに行ってしまったから、私は知らない」と。そうするしか「なかった」。「どこへ行ったのか、何も言わずに行ったので知るわけない」と。日本に送ってから。

——もう一回確認したいんですけど、お兄^オさん^モが日本に行かれたのはお母^オさん^モ [金玉煥さん] が何歳の時ですか？

金：12歳か？

——12歳の時くらい？ お父^アさん^ボは何歳くらい？

金：お父さんが咸徳いる時に [金玉煥さんは] 13歳くらい。たぶん14歳くらいだから、咸徳で暮らした時に犀牛峰から [日本へ] 送ったから、13歳くらいだな。14歳には朝天に来たから。

(以下、次号)

* 本研究は科学研究費補助金（課題番号 21330119）の助成を受けたものである。

【用語解説】

* 1 濟州島在来種の黒豚

朝鮮半島在来の豚は、高句麗時代に中国北部地方から伝来したと言われ、とくに濟州島では独自の進化を遂げた。濟州島在来種は全身が黒い毛で覆われ、小柄だが、環境変化に対する適応力は高く、肉質もよい。しかし20世紀になって、繁殖力が強く、また食肉を多く得られる西洋産の豚が濟州島へ入ってきたことで、交配が進み、純粋な濟州島在来種は減少していった。なお濟州島では養豚の飼料として人糞を使用していたため、農家では豚を便所の地下で飼育するが多かった。金玉煥さんの回想は、このような状況を指したものである。またこのことから、濟州島在来種の豚を^{トンテジ}똥돼지（糞豚）と言う場合もある。

* 2 ^{チョッキガ} 赤旗歌

ここで金玉煥さんが歌っているのは、植民地時代に朝鮮に伝わり、民族解放運動の中で広く歌われた「赤旗歌」という闘争歌である。原曲はクリスマスキャロルとして知られているドイツ民謡の「樅の木」だが、1889年にロンドンの港湾労働者ストライキを激励するため、そのメロディーにジム・コンネルが歌詞をつけ、「The Red Flag」という曲名で歌われるようになった。以後この歌は、イギリス労働党を中心に急速に広まり、アメリカの労働運動でも愛唱された。

日本には1920年ごろ紹介され、社会運動家・赤松克麿の名訳詞で有名になった。またもともと3拍子であった原曲が、日本では行進曲風の4拍子に変わっている。朝鮮には1930年代に伝わり、日本語をほぼ直訳した歌詞がつけられ、日本の植民地支配に抵抗する闘争歌として広く歌われるようになった。金玉煥さんが歌っているのはリフレインの部分で、本来は以下のような歌詞であった。

「높이 들어라 붉은 깃발을 / 그 밑에서 굳게 맹세해 / 비겁한 자야 갈라면 가라 /
우리들은 붉은 기를 지키리라」(高く掲げよ赤旗を / その下で固く誓え / 卑怯者よ去らば去れ / われらは赤旗を守る)

参考までに日本語の歌詞は、以下のようになっていた。

「高く立て赤旗を / その影に死を誓う / 卑怯者去らば去れ / 我等は赤旗守る」

解放後もこの歌は労働運動や社会主義運動の現場などで歌われていたが、大韓民国では政府樹立前後に禁止された。一方、朝鮮民主主義人民共和国では朝鮮戦争のころに朝鮮人民軍の軍歌として歌われ、その後も帝国主義に反対する革命歌として歌い継がれている。なお金玉煥さんが歌っているもうひとつの歌については、曲名を確認できなかった。

* 3 ^{サンボクト} 山の暴徒（再掲，加筆）

3・1節発砲事件後、右翼テロの激化に対抗する武装抗争に備え、社会主義の影響を受けた青年たちを中心として、漢拏山中に遊撃隊が結成された。済州島の人びとは、当時彼らを「^{サンボクト}山の暴徒」「^{サンブデ}山部隊」「^{サンサラム}山の人」などと呼んでいた。

* 4 共和病院

1968年、外科医の兪順奉が中心となって設立した医療法人同友会を経営母体とする総合病院。当時、国民健康保険に加入できなかった在日韓国・朝鮮人が安心して医療を受けられる病院として構想された。大阪市生野区新今里で開院した当初は、医師、看護師、患者すべてが韓国・朝鮮人であったという。1978年に現在の生野区勝山南に移転し、地

域の中核病院としての役割を果たしている。2012年3月現在、診療科目としては、内科、外科、呼吸器内科、消化器内科、消化器外科、循環器内科、神経内科、小児科、整形外科、泌尿器科、皮膚科、肛門外科、精神科、放射線科、リハビリテーション科、人工透析内科があり、病床数は242である。関連施設として介護老人保健施設「ハーモニー共和」、訪問看護ステーション「きょうわ」を持ち、高齢者介護や訪問看護などの事業も展開している。（『在日コリアン辞典』明石書店、2010年、の呉光現執筆「共和病院」など参照。）

* 5 咸徳の大隊本部

4・3事件当時、蜂起した武装隊を鎮圧するため派遣された第9連隊・第2連隊のうち、1個大隊は朝天面（現・済州市朝天邑）咸徳里の旧・咸徳国民学校に本部を置いていた。駐屯の時期は明確ではないが、第9連隊が鎮圧作戦を本格化させた1948年11月ごろに駐屯をはじめ、同年12月29日に第2連隊に交替した後はその第3大隊が駐屯し、第2連隊が撤収する1949年8月までは駐屯し続けたものと見られている。なお咸徳警察支署も1948年5月13日に武装隊の襲撃で全焼した後、同じく旧・咸徳国民学校に移動していた。

咸徳里およびその近隣地域住民たちは、嫌疑をかけられればこの大隊本部に連行され、その多くが殺害された。とくに第2連隊第3大隊は1949年1月、住民約400名を殺害した北村事件を引き起こしている（後掲*6参照）。

なお第2連隊撤収後は再び咸徳国民学校として使用されていたが、同校は1974年に移転し、現在その跡地はリクレーション施設として活用されている。

* 6 北村事件

1949年1月17日、朝天面（現・済州市朝天邑）北村里で韓国軍の手により引き起こされた4・3事件中の代表的な大規模虐殺事件。この日の朝、旧左面（現・済州市旧左邑）細花里に駐屯していた第2連隊第3大隊の一部兵力が大隊本部のある朝天面咸徳里へ移動中、北村里オギ峠で武装隊に奇襲され、兵士2名が死亡した。興奮した第2連隊の兵士たちは、報復のため「暴徒」に内通しているとして北村里を包囲し、300余棟の家屋すべてに火をつけたのち、住民数百名を北村国民学校（現・北村初等学校）の運動場に集結させて付近の農地で銃殺した。その翌日には咸徳里に疎開していた住民の一部も殺害され、2日間で400名ほどの北村里住民が犠牲となった。

2009年3月、北村初等学校付近に北村ノブンスンイ4・3記念館が開館し、周辺には犠牲者を慰霊する記念碑やモニュメントなどが建設されている。

* 7 ^{クァンデモサル} 관뫓모살

4・3事件の時、朝天面（現・済州市朝天邑）咸德里に駐屯していた韓国軍部隊が住民を虐殺した現場のひとつ。当時は砂で覆われた低い丘であったという。1948年12月1日、咸德里周辺に隠れていた青年6名が、武装隊協力者という理由で第9連隊所属大隊の兵士に捕らえられ、この地で住民たちの目の前で銃殺された。兵士たちが立ち去った後、この措置に抗議していた2名の年配男性も、西北青年団出身の応援隊員によって銃殺されている。また1949年1月19日には第2連隊第3大隊が、住民10余名を逃避者の家族として、この地で銃殺した。現在は松の木と芝生に覆われた美しい丘になっている。

おことわり

『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』第13号（2011年10月）に掲載した「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（10・上）」の下篇は、都合により、本論集には掲載できなくなりました。読者のみなさまには、謹んでおことわりとお詫びを申し上げます。

